り、今人の碁うつを見るに聖目をさけて打、古法と異なり、殊に先手に中の聖目に打こと見及ばず、

〔圍碁式〕目算事

石を大旨立てと、半番と、結ちかく成てと三度すべき也、せめていどむときに、合ては敵のはまをうちとらむ度に、かぞへて可知也、敵のはまの員を玄りなば目算不可違、十目計の勝負は習にて我よはく覺也、其心を行はからふべし、勝になりぬと覺ゆるばかりにてかぞへぬは、あやまちの時にいでくるなり、必かぞへ勝負をば可存なり、目算第一の大切也、目算のよきといふは、かぞふるともみえぬ樣にて、さりげなく見せながら勝負をみる也、上手なれども目算をろかなるは、たのもしからぬ事也、二ちうなれども、目算よくすればまけをせぬなり、見證の目をたのむべからず、かならずあしき也、また石を打たる番は、かちとみえて負る事のあるなり、

〔吾妻鏡十八〕元久二年閏七月廿六日辛亥、右衞門權佐朝雅候仙洞、未退出之間、有圍碁會之處、小舍人童走來、招金吾告追討使事、金吾更不驚動、歸參本所、令目算之後、自關東被差上誅罰專使、無據于遁逃、早可給身暇之旨奏訖、〇下略

〔書言字考節用集九言辭〕劫事類、宋王景文圍碁爭劫云々、又說文、人欲去以力脅止曰劫、

〔倭訓栞前編古九〕こふ〇中略　圍碁にいふは劫字也、源氏におもきこふにといふも、劫にとりてつむる意也、

〔圍碁式〕劫事

我石をば、かねて劫ときやうに打置て、敵の石を劫に多成樣に打成思ふなり、打てとらるゝ跡に、手を打、劫をせむとするまで案ずる也、碁の手を案ずるといふは、劫に成員をかぞふるなり、劫をするには吉番をばたばうて、つまりてさしかへむずる所にあてむと思也、また始は劫をきらは